

# 死亡原因の解析から見える認知症看護の盲点

長崎腎クリニック

○高木志緒理 岩永敦子 丸山裕子

## 【背景】

認知症患者は透析治療遂行でさえ苦慮する事が多い為に、看護が安全管理に集中しがちである。

## 【目的】

認知症患者の長期追跡調査を行い、認知症看護の盲点を検証する。

## 【対象と方法】

認知機能評価を行った外来透析患者 32 名を HDS20 点以下の認知症群 10 名と、21 点以上の非認知症群 22 名の 2 群に分類し、入院回数・入院原因・5 年生存率・死亡原因を比較検討する。

## 【倫理的配慮】

調査は研究以外の目的に使用しない旨を説明し同意を得た。

## 【結果】

- 1) 観察開始時点の年齢や栄養状態等の一般的な生命予後規定因子で 2 群間に有意差はなかった。
- 2) 認知症群は摂食障害による入院と社会的入院が有意に多かった。
- 3) 認知症群は心血管障害死の割合が有意に多かった。
- 4) 認知症群は 5 年生存率が有意に不良であった。

## 【考察】

認知症患者は食思低下や介護困難で入院する事が多いが、長期経過では入院原因とは別の心血管障害による死亡率が高くなり生命予後が悪化していた。認知症患者は誤嚥性肺炎等による死亡が多いのではないかと予想していたが、今回の調査で認知症患者は透析患の中でも特に心血管障害のハイリスクグループである事が判明した。患者に接する機会が最も多い看護師が安全管理や入院原因にこだわると、正確な訴えが出来ない認知症患者においては心血管障害早期発見の盲点になる可能性がある。

**【結論】**

「認知症患者は心血管障害の超ハイリスク患者である」という視点を念頭において看護する必要がある。